

文化

山陰
リトルプレス紀行

南陀楼綾繁

〈2〉

鳥取市の「定有堂書店」 アメリカ在住の寄稿者もいに久しぶりに寄ったら、店

主の奈良敏行さんから『音 帰りの電車で何げなくペ 信不通 本のビオトープ』 ージを開いたら面白く、十 を手渡された。A5判・30 何冊ぶんのバックナンバー

ほどの小冊子だ。書店員、 新聞記者、ロシア語教師な ど、さまざまな立場の15人 ほどのエッセーが載っている。鳥取県に住む人が中心 のようだが、東京や熊本、

自由に書ける小さな空間

を読み終わってしまった。 気づく人は限られますね。 が『音信不通』です。詩や 日常の瞬間のスケッチ、仕 持っていく人を見ると『仲 エッセー、論文などを載せ 事について、郷土史の考察 間だ』と思うんです」と奈 ていました」

など各自が好きに書いてい 良さんは言う。じつは『音 信不通』には「第二期」と に書店をはじめたときに店 名にした。その後、紙やホ ームページで『定有堂ジャ ーナル』などいくつかのミ ニコミを出してきた。この 『音信不通』は2016年 8月に創刊。毎月発行し、 現在33号に達する。

呼び方がよく似合う。しか も、このすてきな冊子は無 で出会った人たちと一緒に 料で配布されているのだ。 『定有』というミニコミを 出した。それとは別に 個人誌として出していたの オトープ」は奈良さんの造

『音信不通』



『音信不通』を手にする 奈良敏行さん—鳥取市元町、 定有堂書店

(ライター・編集者)

隔週金曜日掲載